



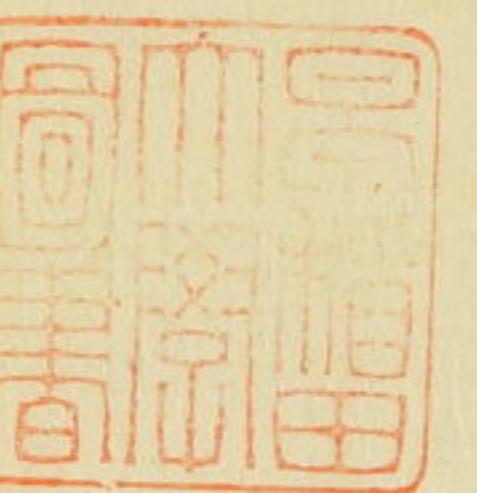
官
刻
孝
義
錄

卷十九

陸
奥
八

口 g
1596
19

8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9



參義錄卷之十九

陰奧國八

參義者左郎作

左郎作ハ郎麻忍下河あ村乃町舊役孫六郎一
藩代の下男あり年々しくつと名をく私あく是事
のこじくやううき親しき従の弓射禮義をと
ぬきとをとくのを裏とてとてはあくこひる
とくおとく野山田畠の業ううねたれ食事にいと
ちあくふとついたまことうの華日あきハ勒と
伏生一郎の價をたくり四あくうれ食とるをも

至二十年之紀かの生人の公納乃不足と補りしりけ
きの生人もまことに感しこれより十年年を以て御
上の賄と下のせんをもたらすものにて親奉作も
とふうへやに主人の賣へんをもねりぬて居
らん事か焉るうへんとくらへんといひ給金
をもとへとつて又金をあらへむるのをも
くづく主人乃用ひあるとさせつゝ事とぞゆ
うの主人も別人をもくいづかへ我を失へよ
もくくーと給金をもあらへむるのをく金の
あらへうきそれ穀をたよせむ事のよきと

里ゆきハ領主が許へあるうちこに石のとどもぢ旨
姓ふとうたうたうゆきんとあると思義の祠うへ
けふうれとひとう身の車うきはそれをもあき
りきことのき一百姓とありあきとのうへ生人の農
事もんあやくふくとくへうほぬはまよくあ
らせあくおこなひくへれ成長へりうんのうへ身
かの食料かとれはとれくつゝとかはこれふゆき
きうゑあくへ生人の産業をとのまち産業とふ
ひゆきへ別よつ方を立んともふんとくいよく
日頃積力と空へて勤めうへ領主うへれ用事まへ

うけあつて村の人々に觸ること事ありてその
事書付てお節供につひづれ、そのまゝあがて
しつらば用とたのじうでく云葉といやーうへ
てこれを接げし。の材人やももとひくそり
ときま保二年には車頭主よすえ水が井とさ
づく其行をを嘗せーとそ

考行者長吉

奥後羽中地村の百姓長吉ハ田畠内にふるをいき
公とまんへ候むちう村役人の守車あつても人よ
先へうちてり隸役乃事ゆく人まよふされとも

「日もかく車かく車」と丸貢ね又ハ小割役ふと
へちぬあく滞る事あくあくあきなみ坐よも居
にそれ車ひすりめつゝ向百姓内うちも公納滞る
者あきはみつら九料をもく引くておもあし
父母ひとりふの身布立郎からにあつと教父を
て老尼としの御んこうよ孝盡せーうふ身とともに
もくわ妻ふよづるあく父母よづくとふ車
さくよ親友次女車をもくひく歎きこれ車と車
の車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車
と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車

とりよに一つこすりつとりよにくれぬよあら茶穀よ
すくといふては、番販よりくるあくこのあくに至
て市三郎こうかに移りとどめりば村へ二年松の櫻
ふりのすきしての去告一つ嫁もすひ内とまく事多
えもうこうしての領あくも因俗をれりとも
ともやゝされハ案保二年に領主こう茶とどめせ
そ寝美しくなり

奇特者林在馬

會津羽桑幕内村の町長役林在馬ハふくこゆうりの
村長すももくれどの財入り元七十一年あるうその

身のもとこうりあつてのれ民をとくとくまもえ々小刻
議がこじくるものあく期よとくとく事あくあくさ
仕業とももれべんもあらとねあらそひしとあら
やけの裁判うきく審さらにきく争しきもな
小役錢あじて財より生させぬまへあつてとある事を
ちうり細内ねうきる價を日く小高とひていさか
あづの金券のくれよつてこれとくとへあすく
公納乃きととけく細内ねうきのあくへあき
くしてその利をとくとく一年いをの運う鐵を出へ
て先これとたとけを後やうよつとおもへじう

とくそろうとけるも利根をりま事ハとくゆ
あくそれあつての地が開墾より和順せり父の与次
太田も農事にこもるゝもの多く年々しくま
と用ひ金津農書とつて元禄二年に頒えま
さむけし一の米あるへと之種もらひと株右田の
稻うらひて育てるものよりうへまつて播穀
とせし年に其穀とくもくとうかへり
ひん事どくとてふかふ牛馬大根の類とく
る事とくもくうけきへりとくもくあひ生くも
思もすとくわあり父母ありしやどひ孝意うと

うらは見す親能みじつよく下男下女よくるま
てゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
里され、享保二年頃立とう寝若とくとくとくと
くとくね父と次女と事ハ承ふ傳あり

奉行者安彦玄智

安彦玄智、若松の城下林木町の醫者あり先祖
寛之出家あるの家士たすりて親は郎右衛門とくもく
舍浦より肥後ちよほくへて病気より玄智
かくいとけもくとくれハ他よりまふしてお癌の経
分もあくへかそれも病者となり他はようくん

事と二ひに席を並べてありてゆる跡絶く母と
玄齋の方とそぞらめせんとあくて玄齋十二
乃年に戸小出く醫術とよびてつまんなく少
うこめりしむのをもやりはまくよ江戸よ
て醫と業とどもれど其ふとて家と續くしん
事とぞそれとあらう醫業とけしと故に老
母とまんとあるを今人の家とぞあるその不
意すもたゞさうとく母と娘とくもあやどり
へされとま父毋よつて寒母のむえづくん事不肖
の才よハ是まか一叶ハ其の才をくづくとく母

とぞ多くん事あるよとぞとりひとうけつと後よ
着ねの城下よがつ母とじくとト女とつまくと
乃方ハ廉服をすくい藥箱と懷よとぞくの先
こうしやくく療治とおろ若多くいとあるも安
くうされハ妻とじくと人のもくしきよ母のうれ
けいきん事ととまれて志うせと怪う人あくと
せとうてことづくられ費用ともて念深の家計に響
くめくめ老を裏へく祀すも自立あらぬと醫
業のせきくさにそのとつけのさくさん事とされ
ハそひ附よと妻とめくもと小暮を盡すとく

けりつるや八千歳をうせぬ妻の親乃もとよゆゑ
三人ありしと筆すらつて娘二人の姓よりあせぬ
ふとももろくれ姫とまよをぬくひは戸へもの
不せくその難貴といどととあつひまとくを
隣のものかすもさくと深く貧窮の病ハアヤの力
とくべくそれ謝れとうけとすく駆るゆふとつ
く報いん姫とまよりうばに御の不吉とうしよ
まよき頃生ひは車らこゝへハ寛保二年娘と
あくべく寝弟せうとそ

家内贋者傳右翁

信玄公の若ねの城下七日町の主めあり父ハ左近とく
七十にあまり母とも小な生とお孫左近もいた事と
て二人あるがともに信玄公の御子と食
ぬあくふつを孝あむるにあひてともにあ親と大
切す。二人内娘はつまむあまくころくこれ四十
八年一あよもととくそのまゝ同居せり。まのうちや
しのもとあらわせのととく和順せり。おうへゆもや
けやくうとくそのまゝ同居せり。まのきを左近
ハもやくう塗師の業を掌ひゆうされ、信玄
うれ求とけり。まよううてその職業をつま

中せ百姓の数よつらあらせもやうを中の見
たるつてふりあひふきくとめうとまくとくとくとく
事せんがふきあらはとくうけいとまく法とも
おほてひくとくに見う業とたとけつ父母と毛
散せりやうくとくうと頑主にうくへし
い業とどくせて寝主へと業保ニ率北車と毛
毛

忠義者とふ郎

會津郡の浪村の百姓とふ郎とすまわり若松
の城下六日町の檢断役恩七左衛門とくらきのよ繁

券ともくはへりそのひとなり実義より十八年ぬ
てつとあしむとせたる家裏にて給金ふくも財くに
ひらうせとま李施とくわめ一衣ふくあこの称ひき異
ふふのく半あるふねべへもふうひくはせたる長
病よて家産まほくへ寝へ今ひ人もうへつひとく
ふふ郎よも順うらむこととくとくに元けきひ年こ
ちの厚き恵こじゆよとむくよひきまくひくめとく
てまくらとくとくと儲へあらる金かきとまくひくめあくけ
金へとあひてこあひうあきけひよて耶麻翁乃
然首代の馬を來めゆり傳馬をひ往來のあわ

又ハ益事をつけて送り去砂からくもちらうひその賃を
さうして主人の飢餓をたまへて少額をうちう水とく
ミ食事と調べついもいそがもいう事かし友に山
濱村より田宅をあうしか山一村ますある婦聟
治吉清よめ妻、妻と親してものいづらひ年久
しく食も見え衣服もやきく、之くへる事はなれ
恩もあきこほんよつへんのうが志としに里にへり、オ
成たあんよばがく、亦の主人よも仕へる、オ乃
トあくまうへやうあくとじことしるをとのこでう
あらぬよへ色あらねどくくほんのあらふせぬ

とくとく帳とくしん事不意あらといふものも
て主人の雇業ぬくひかとれこくあらんとほつ
すりか他事かくともいふくわと至りけりや
ちく去率れ松主人の主よ家金しきと買取く
うつて任せに袋詰あくたのくめよまひへ、東
六日町の本縁ある方にうつて己の焼殻の廐よもと
て馬をもり来ぬよ記て東六日町の通い僧馬又はそ
らの僧をもく主人をたとけなるか主人と云際と
あらぬよへたのもよふつまくかとりひへ言葉の
そつてやむりきとむへじ乗も焼火をさせと

地（アシカ）とたよつけもうこそあへけるとまくまん
親（シキ）しもかづり先（セン）かとあくとあそびよせとゑり
つりへしとまうされ（マサニ）まくも町のきのも領主につひあく
寝（ヌイ）と称（シメル）ひにより享保四年茶（チャ）をどうせそ
賞（シメル）へ

奉行者庵三郎

若松の城下三の町（ミチ）ある庵三郎（アンサンロウ）はさむよ塗師
塗（ツル）とよの聲（ヨリ）とあらの聲（ヨリ）とあらしが後（アフタ）
生（スル）よま云（クモリ）清（セイ）といへる男（ヒト）生（スル）ての所（シテ）住居（ジウジヤウ）
すむもの宣（アハラ）しれは隨（スル）は家つづりて庵三郎（アンサンロウ）

妻（シメ）とすの移（シフテ）ふ家（シムカ）は実（シメ）ふ家（シムカ）云（クモリ）清（セイ）よそあつてくら
生（スル）た鶴（ハク）走（ハシル）婦（フミ）との病（クモリ）の才（タレ）もあくと
くらあくゆきくつわい母（マミ）といふ家（シムカ）云（クモリ）清（セイ）は養（ヨシム）ひ生（スル）
鶴（ハク）の庵三郎（アンサンロウ）が方（カタ）ようつて居（リフテ）に生（スル）云（クモリ）清（セイ）がひよ
くらえくらうと云（クモリ）妻（シメ）とも養（ヨシム）ひよしけもひまくら
も庵三郎（アンサンロウ）がおよじくらうて奉（シメル）せしよ庵三郎（アンサンロウ）
の妻（シメ）はせせ早（ハヤシ）くして生（スル）た鶴（ハク）もつこことうせせ生（スル）云（クモリ）清（セイ）
色（カラ）えもくらうねあらうりと妻（シメ）父（チチ）の譲（シメル）る家（シムカ）ありと
あくよも妻（シメ）と日（ヒル）共（コトハシ）とて居（リフテ）と至（シテ）

てお母とやへあひまを満こりゐのありけりとゆ乃
側のあらしめその才ひひそまう塗ぬの葉をつと
毛ぬくらむかと絶景の日がたゞと形見るねハ
とうそうせと七十あるまく母の病よ犯されあさ
かとうふよもへは忍きつゝこと甚ふと候と
アタシ或ハ廁より入るべく時移きの間と多くそ乃
ある事を好じくせあつてつまよ湯をと多くつみ
ノよ後さらやうよあうけ立と母もおよひと
きひとしきよ出く水がと波ちひあけつよつた

て傷きもやせんと井桶を新よづくられとだもんを
とも思ひて水汲き、車かくあひそとぞこもくに
ひえどりとよと称へあすうの車よりくあうか
いてちよ母の信しゆく小篠山権現の託宣ありと
てお詫しけるハ今年ハ井桶のある所、方角もあく
くことよ水の類ハ井のくらうありとめ告られ、必證
さあくと云葉をわづけつづりこよして其事と
止めうらうと又母の親しきものもとよすと一日を
つまみ寄りやうよくらざれ、夜あく行て起外と
つまみ寄りの時のあも側を離きと醫師をまよ

を一薬を求め食事かじも好みよすせぬ母の津林
おれ後せしゝ人のあふやけもまよひものもありと矣
しきて衣之郎とどりよりは樂もしくあらそひ
けり町の役人へ車を領まよ告げりが承をあくへ
て其孝を称け里見家保は年の事あり

孝行者赤城熱志湯

善松の城下北小説町の名主赤城熱志湯うる祖と赤城
玄蕃忠清とて芦名義慶入幕下あり源治那鑿川
庄夏井村よりて玄蕃の子み箇村と頼りむる
と天正年中義慶滅び後忠清も民方にさほ

らく子孫たその西よ植へか祖父慈志湯といふものなり
しては町乃商家とあり父の瀬志湯うりけとこうろ
名主こう瀬志湯後は清運と名を改め今年八十七
年くうせ達母ハ七十余歳よりこそ慈志湯とくう
父母よつてへく孝と云ふその妻もよく圍姑と云ふ
事アゆりやうなう父目よしとひき帰してよあらひ
に懶しき食ぬすもんをつけ三つうち配膳してをだ
是もと洗ふ附ハ石つぶきの多くといへてもかげく
人のまじくるゆすりやねい二つともよだれもくすりて
賊きるやうくへや方ひの事語りと歎き或ハ喜ふる

語りかこゆるといへども猶く此記録と云ふて
せ謡をぬめくもつてうらうらひ小音かと重む附へト放
乃中の方々よりのよのうにせらうる者があくる
日かえくより休ませしとそ人の家に招くる事と
たゞひれつてあるねあら様ともいふ事もつまく
家つらまつてゐるがくかくし何のやうづけふ
の物語ありはるかと稚ふのとんとゆうりもとく連
くと語りつく清輝温泉とこれまくつてがく
るが年を経すもあらゆば年老く懐古の因く
くは生湯の山邊をこよなうよ歎若せぬふくとした

ナラセカーこと小笠郡天寧寺町となりよゆり家へと
移り住へ先年の春より、二十町ばかり遙かを日
ごとく小笠郡安曇とよひとて方外事のみ父の
差事によませ父も多勞をうるやくもとれ家はあ
里たまと往温泉ゆうゆう事ひうらうきとおけり
老をはおりて歩行も叶ひ病ハ養生の為と多く領主
よこひく第とよおよの事とあるされつまひよ
あらよ往來したうき其後自うとくありてひま
よもよふらう走婦のわらふまくわくらることよ必
添て抜け起居ともよふをさくわくい妻の方よま

と大路の上あ見えまさんといへば童販とつままで今
ハ誰そ通ひるじうひうりい父を来見るがこゝろに抱
高す人ものくと若きらしむふ出んとあるが下
致よ背負せんの怪よ孝盡せりつは年に月乃はうり
あつきて頬ともあく絆母もまた老年うきひを
あ水の車あつて老母のまのあくうふくうを車
もやあらんとさひあら母といまの車よ福うし見
日とくの飲食の類と拂り父の喉をさくさくも行
母れ安否といひ父の病まうてひもくよ孫を嘗じ
とへるまくまく藥白湯やうれりのまく車

試てすゑを支拂側ともふきとゑくか甲斐うくと
うせけまへるこのごく教きかく之孝多よんを至
し無いむそく母の起居と何ひ後のまこと累てハ量
無どき母れあらゆうひて孝盡せり慈云清早
よ及づる方すく父の世よあり一財はまとくれ事そ
乃有よ隨ひて行はる事なく善とをめ恩と返げ下
といつてこそ熟よ教識せり道の孤獨の窮屈あれ
ハそれ膳事のむれをはくらひれをよも及へまこと
とあらいたく昔ふとソひ立てく金後をあくへし事
もあくもとくまつまつまつまつまつまつまつまつま

つゝ事あると其財の餘之儀よその費を生ひてめ
んの高家のかまくらあらんとくらやくうり月と
かくびうりに積つほく坐ざくらも積立し。その榮
礼とけとありうきは税官の社へさしけねのこれら全
三千石があらまると年くくよいよかつて増くくすを
のこころの窮民を救小料とそろげゆる事換
ひぬきのうり領主がおもく享保に年米あくとせ
しハその賞よりとぞぞやえ

孝行者市を廓

市を廓ふた浴殿を田村の水呑百姓くく一畝の田えへ

あこね貧民あり無ひよくうせきく父のとそをけつゆ
よ荒蕪かとつづりて業とと十年かととむによむく
のたとけとぬく極きをあへ不と來り小宅といと
うと父とどもは便り父の仁義湯とく八年よむと
一つ酒のと年とこのちへあへとこ中つも終と被色
いぬくこきに飲じじは春秋の初うり父病とぬれ
のまゆはほまくあづりくやまくとも喜びの神も
あら称ひ日ごとくよ荒蕪を養ふせし。かつてハ船く
出くわく、遠く不すくも賣あつくとげふといひだ
よみうとのと走り與うての利もく坐甲のうら

よハ必病リ來リと食わ葉向くもと側を立ムキとも
とあつて之坐る時ハあらうの者より慇懃と至シ老父
の車頃ミとけとへ若市を席上に行ふ感して實に
ふを説きづれ程久しく父の病よりうて商の便を
くあくよ利潤も薄うん事と父のそへつ
きや痛めかんと市を離ミつゝ従様かどを儀
すて余多く往くるよせんと其ふを安んせ
しも又酒食の量をあきびく酒へとまじりあ
る財産の薦をとくとソノ強毒も無へ称ハ
醫師のもとよりゆきこせと云ふは好とのあられ

ハシタケウタマされと價格うぬねるもひととく其ま
ことととけぬさせぬうとうとく怪ひてとくくら
いおんととむよ附あらぬ放すやゆる車やくへや
うへよ船づとおちがく金のまよ調してをうぬ
後つゆよ病とする車あへと年うれりうせと市
を離ゆく歎きせよ「年せし財主」のまよ荐
の及ひえとふらむ車をさるかん不孝のう
里ありとやうと車保み車頃ヨリ来をあ
づくそれひを嘗へく

弃特者右馬

太無のいとと大治元二日町村乃者よりか三十七年あ
へよ田引戸田沢村の町並改ふるをもきりける田
地の高ひ六十石余もくつゝ生きつゝ淳至ゆく豪情
源くお行もすく西くうきは村古より去風よ
くらと多くしに者のみありてもも争論ると
経きりくわがつうよめりてうううは誠正
まく諸民のむおやううの教説せりが自登と
風と稱して村のうちへ和せりかつゝ農事奉す妻
一け毛ひらく諭へ示へ人もすく其旨の股
一背きりくわとよ実のうも年くよばりて

人くの多しともやむらとくつかつて木の木を
柱て雪裏よしほはぬ車を考へし一家くくに
柱くらく各の飲料とするよ味づくしてうりに
は村の久くこくらひゆく塗装の差りちくろ
ものういたよきよとく建らも乃あきの必須も
の作れ業ありとりひもく右もくらく氏人乃
富業へく差づくる事あるが云地の林もくろこひ
きくとくをゆる志せことしのうもくへ貪くとく
らとたつて力ある者多くうり起りて僻言あ
んとく宝来のほくめて差を建しり何の様

もあらて子孫いやすくよ景へ村乃惑ひをもあし
たり家事と治る事ハあらうり親族の中よも
和順し石作は男女ふくらむ多くは勤めを
務ふ必ひそりて多く休めをすりそく勞せ
じるときの酒かとあくへそくふとつけ石仕ひぬ右
萬巻の後、ふ云を左筆もあく父の志と繋ぐ勤
めりとま保子率領よりうけ事と當して某
といふとよ

寺特者勧に原

耶麻忍小荒井村乃鷺郷は坂井家と云ふあつ其

而乃貯蓄役勘に耶ハ代々貯蓄の家あるが平生乃
不以正しく百姓和睦して風俗他に二えくう父
善友也ハ高四十石ソリの極くめうとさく因窮して
年々此公納もとくきかり全も多くありわざく
物もの中あつて貯地よいもく人のねとあり殿
難よせ候後もとくは坂井家と家致つて
手二十石余とよく土地もあらぬ故まみ貧乏也
と勤む耶は代いゆく年もうりしめ父の勤と接
ろりつゝと業しめくらし裁家乃くよれ
らとつづれ一村もあくしもと田地乃く無

く水のあもぢあへこかへ実のりもこうへ
らぬようり公納もとこうありと諸人よね徑
やうて六十率さんよ百姓ともよおもうて秋
刈りまへ後田より水をうり冬の中も往來らばあを
うけ植ゑたりまへるやへ精至りまへつ果
して旱泥熟田のうど地と変せられ走らうへ
てまみのとの不作もあうりと旦年の候ありて宣
しく日と消と事と戒しめ元へ人の主業と
せまほ種た地を耕しては羸餘仕種もあると
兼てうりいややとまへく脚すくも高りあは

いそのうちよ不足ありて公納もとくと難候ま
しふ里のれもへ歩うりちゆうとく古どもふ
へどそ示へけるに事へくもあうり或ハ二年よ
と限をあへて充乎こゑく農事と勤めまへ
とと怠きくやこゑくあるきる者多く走うりも
も正月と三月よへ度つて村乃民をあつて其年の
氣候を考へまくくわ種類の農事時を授け本地に
けるがと何くもとえらひ立ちくと種よ水旱の患
を遠ざけ収納するの穀を徳よまれぬ父農禽
老て代を勘定郎よ譲りひととく家富く古

のりまのとくへへ貨物よりきへ田地をもうけも
とくへん馬も多く高も五千石余とあり家の内じ
つよく自作乃へとくきくふ私とくべ事より勞
と施さに杖の難を行ひへよ易きと役る事を
あくへす陰を惜したまくめもうく行とくにて
一村の者酒をのき煙草を吸ふもゆくたのと用
事ありて他へやけともくへ帰きて車とつとそ
階乗ふとくまみへうにもかひくらと飲まくわ
りの觸る事あらども一村の者とまあうたまきの
いとを費へあんとくへへへへへへへへへへへとその車

と就字せまうりとせけへとくひ傳る事とせり
小荒井代本村の酒造る事を農業とどもの多紀
名遠近うり茶商のもの役多つての來うるよと以
の役井の茶うちへとくもくもくもく多く
はるひ茶とて買えりけるこれら全く勘に席う教
識のりくとて買えりけるこれに之の者も
よよくせくとて買えりけるこれに之の者も
忠孝者三十郎

三十郎ハ會津の家士百瀬セミ清うと在下中男よ
てりこへ安積郡赤澤村乃湯の東役乃者あり六

奉若よりけ家よまうつへけらるやくうへ忠孝
乃はこゑもあくやくこよ作ける忠孝傳集解乃
中よばこ十郎が傳あうと多く写して主によ
里領を出せり其久より

安積の船東役二十郎初より父母よ孝行あり
親を賣りて二十の巣福良村の長泉寺に
まかし其金をも助とて明暦九言若松城
トよ出くつて二人のひよ子ひに奉りてと
り二十人衆の尊より後邊多門といふ土乃奴と
ある多門少祿とて家黒多く困窮せず三十郎

日こと小陰祖とおのとひよよひの登りと薪と裸
業とやうよのつとはかへしてあらねじと裸もとを裸
と付集めぬをとすよと主人のあくつてこそ友あり
けむひまかすくあひあわせと分のことをあうけ
と積立天氣あつてひと遙くにそらへ入る
うれめるがも他人の二人をうつておなみ
多きこゑもいは被友も其力とをうしと勵みつる
志を感して度毎酒をあこひく勞ひければ
多門の父と玄巣とよ白川の守某公よつよ
ひる病よゆううの激を起して多門乃と之

告ありけり。いなづま邦君よ隠とも白川へ馳
行。老父の病よ第、ともどもとつとつと多きの多る多き
内祖母いふの白川ゆゑに、嘔すの急がりと嘔す
烟らへうと三十郎もむにとて縁より十處乃至目
をとちて白川ゆゑく百二十里六町を内所を秋ノ日
縁あると、日にあり、玄養の底ありをとよく監督
の立ぬり。祖母へ安否をあらへじる事八度從來
故て十六度あり。かく玄養の病も恢復して多く
つも若松よ帰りと三十郎一つ志と窓よ寝称して
順ととせけり。玄養年より二年の泊里

よ若く足見方次第云満。の農業の助をあへ又二十
八年あくよつと、内六年の間、田石とさくらん人
乃奴である事、故く十五年の官ゆゑの餘金全
悉く足の運びと貢税のそと、父母代まひり
あくたう父のうとある所の田畠をめぐつよもち
と見えよあくよげり。足家よありて父母を裏
ふやかくよよげて悉く先よづれ送りぬ。父母
ハ数年も俱よ七十とこそなく死せり。余生のを
よき人の據と仰ひ。是方より行そつて未だよ
き人ののりとゆる事あへぬ。よくよことを

もゆくせに奉人の清ひぬを、主もあつまく
主ぐくすくかへりけりとや父母をうぐくとく
よ酒肴菓菓のくづのいたまきいげりとく
父母経つまく後も足よつふるの程あくと
とかきあらへとむりことと三十郎三十六
歳とく

けすを領主一見とて三十郎お茶をさわせあり
さくは享保丙午年乃事なり

忠義者八玄清

耶麻教壇下村百姓八玄清の元禄十一年若松の城下

この町の耕作と左衛門つらもくよへ率をゆきりては拂
へりか勤くよすめやうめくよ率くよ期を改め
て室永田年あるくナ一千年石仕事と左衛門の家次
第ふ貧しくありあたしの日へてみ率もう少
五年あるく八年うねハ猪食もよくて仕へ居といふ
くも大苦よせすうり拂の其價もくよ猪財僕のそな
城下みの町よがとうるる家とゆて拂りへりだ
猪食乃あらもよい是を八玄清よ後さんとて八全
う猪猪食もよくて仕へいかうけ金のよろす

て生料はあくとんとにあらねどやくまし中
りてせんじきゆめにこきぬもくいやうつも
をくじふくまくく仕へる者すもハなむと
のくとけもせすべしけとくろゆすくせん
うこかくといへばま満いへるは一一年から残す年
キムソリ五仕はきてる田恩經くら称はば八年乃社
内給ふふせん社もくばつまうつと田惣も
さくらもくあくまの翁の伯父惣ふくよの我
身や年々く仕へそく老そく後才とくさんと
せざるへ一一年若きうらよ候年もひととくせん

うかくひせし事もあきとあくく年つう
あくくかくとすもくうくことくがくくがけくあれ
んふ病あくとくくうけと病あく左乳のも病つ
こみの左乳もあく十二りのあれ、右乳の業
もえまくらくとく窮迫ひ及づるとま満むく
走りぬく漆ね毛あつめをとくとくひとく
とくその腰とくとくとくとくとくとくとくと
ぬい買來ちくまくま東保二年あくこ年の東
京にもまくとふれかへつるよ絶りぬ妻み乃
あすくともくまくまくまくまくまくまくまく

を乞うて業を勧めむる所候とゆくハ日傭
あとの生ま價をどうて毎日の用途をうそとけく
この日へとみ年に月よりの毎もうせすと後は
人間たまつて業を乞ふと何くれと云ふと後見
して産業を勧めじば事領主よこえし
一ツハ日へとみ年業をうそせて褒美あつてと云

寺特者小七

小七ハ益松の城下甲斐町より太ふと業と云ふを説
う從事すとみ年をとくにうその道の事すと
ありふれ事と云ひて師乃傳き湯業者云ふ

每ありて其家主婦は二人のふおうりへ船タの
もときのひもたらしぬ事のみあつてとみ年と云ふ
里中風をねひくも足あひき職業つてじる事
あつと小七もく業とつとあて師乃家七人乃食
をとむとけそのわらくよハ傳き湯の施をあつひ
旅の日目とよゆをハ小七もくもよ起居とわ
頃く又温泉の旅館り長らじいの中くまく
よあつて薬乞はがくの事ありとて病ひとくと
とく小七の之風よ起てうと師のわくよ行く病

のをぬくとく語りてうけあつたり業とは
とあくがれとぞよもくねらうするあちんがあきへ
必包えゆりてきめぬ其の年傍を拂四十三罪より
厄年あきとあくしけをハ小七の夜をとくとく
親経或ハ拂きふろきのをとくとくゆきゆの祝
をとくとくの念の念ん車とわうの拂よとくひげ
其年法花寺とす寺は庫裏造りくんとそ檀
誠の人くおもむく小七の五精こと志のうじて
先づくびとくとの株漂とくとく業のゆつと
どものよあせりが殺多の玉らよおほせくと極き

事ありぬくめ余せり人て年若とおよもく
およそ事の株漂としるい面目あるうと業せりに
全くこつづの力あると師乃傳云拂う腰しき
まづうとひづたとけとぬるるきこれとくも
師の力あるとけよとくへ伝うつの骨わうあん
とりひて功よ不こうのきくもとくうとく骨をえん
キヨム事のがくともあひうらとくとくうら師の業
またとけ家の内和らき腰へうき業保七年頃
うきうう年とくうせく其志と業へ

見守候者与八郎

若松乃城下甲賀町治布施の傍生にてある与八郎、
深ねの愁をつくる事とよきにひどき父義吉は
二十一年より六十四歳にて母ハ六十又十一年
とて死ぬまことに親とも長病ありてよくあまし
くありて業ふんをつき其のうすと泣く孝養
ノニ先引在裏ハ二十一年九月仙道の絢巻へり
より年強くもかへり未と与八郎つゝぬふかく
弱ありけどもつゆよきとせんとくしておか
せりと領主にうへてあり甚後是の眼とや
くつゆの自志あるありとぞもあらわく

えりこりうへりかお命も危きりとすその
あらても大極よばかりの頃主へらひて二十七年ご
とよつてゆきとれども病者とあつてよきも自生る
称ハ超外すもふとつけ日と北食也も与八郎すむ
とよ仕立物の釋を窓よどみとすのみ方
ハくら河沿教主本洪慈院堂上町京あとつ
村くへ職事とつとあひて承よ入るそくうげる隠
きぬきかくもおをゆり或ハ酒肴など
ゆくゆくを起すともい称すあきは屋のつまとも
おうとあくもよくうひ熱め湯茶の事二便乃

やうひよもまとおきこゑひあくらへとあゆひて涼すず
とくせきまへきことぬせたるのぬ中すも古夜す
ことこのつゝよどせその力い萬葉してえうす
いとひふく親のとくに孝義もと見は見えもすと
ひくくすといつくしすくり教す事じとあ
きハ涙うら拂ひて悦ひうて又怨うらみへば
うて怨うらめ仰あおてうやうし、うせんとふを輝てるく見
才ともに酒をこのとされど永る事じつづく
きはその才うい縛つかてすくと足あしのとをめぐら
さううき者ものが貯たまへて獨慰ひとりむと八郎

妻めとじくしかやすらく窮苦きゆくよせすうり見み乃のとく
之隠かくよあらん事ことと忍しのぎしのぎもすく離別りべつせり見みそ
六ろく十じゆよよくらぬ役えひひてひよく力ちからも衰しおへ病びやくも重
くありしすく今いまの職業しょくぎともりくとむくすら翁
里さとにて養育いくよせり享保けいほう九年九年は寧な頼主よりぬしにつくろ
ものあすくすくい寝ねあとくとて余のとあくへぬ

孝行者九十郎

九十郎こじゅうろうハ若松の城下大町の者あり母おやハ十二年じゅうに生うれ
生うれせばさう父おと継母つぐおとすとそ俊としなける其力ちからと
うり文ふみの名な字じへる事こともあらず母おやと実父じつお継母つぐおの庵

まもたく臘く夜服のねまにもさく薙糸と好
すと枕の縫く車と葉くして見る車く父
娘たぬゑく年うり痴氣をや之起外もひつ
くまうも氣うつむ老うるを達母とおともり
娘立てて附そひ日教くらて起若もさう称と稱
のつらぬる縫をさく車とてすくはさんどよ
にじきくつれ麻子ともあくうつり系よ
うて縫の糸とくじし船タの食すも魚さく
味うといへ船舷その小魚と通と謂へ事く
まえ又小鴨が病ふよとまうと便乃坐まくとも

ひととまことを小鳥かともまけよまへるハ必もくめ
すこい事うきまハ羚羊とぞくめんとぞくと市
の市よハきよめのきハ山里よこと傍やうて求めニ
又林より猪の肉とくハすくとつよこれハ猪そ
ろ地よふけきハ猿商ハリサマのとて幸運取うり
やうやく求めゆか病ふまうらぬくとくを师
のいへはとくめうりとせきゆくとおとふをまくと
おめうら日くよ食むる事とく三日の病うらむ
あらぬ事とよとむにむれむの事と
いへともつゆふよたうと細きまことひりとまうと

と人目をあつひて毛宿のよ丑の刻よりと七時
と父乃為を行ひ又あつうせんのいづもやる長
きらぬ小神はふ度まつてもし又ハル院供
を百万遍唱ふる事ある習ひありとりといふ
あらゆる事それいふ事があると云ふある
一ありとぞすまに若あくわん時いへせんくよ
ううともよく世よあらん宿をもくあはりん
そを意かるくとくくつけひまと帳面に業乃中
すも業乞はれりとえくさくらん參
ふたりも便あらねとも謂へを免そ乃身の簾食

して日既送れ里程をかう説けらる事ありて
はるよ享保十年の秋乃からまよ父ハラセぬ後の事
さうじ力もありてくわくわくせん者ソヒアセ
て助走せんとどうよ先やまと車うちひて轂も
乗も才よ子つるやどひのくつう是も貢と申よ
てよくかくふかくねく椀入繪のうけと見る所見
くつよいよかつ貨銀とあつけとけりふてそありくる
主行法までのすとと同之年に領主うり某と
アラウモ

貞言者せん

耶麻忍シカ一村乃百姓本を爲つゝ妻せんいこそハ多々く
貞吉の毛代あり同へ忍一乃戸村乃百姓を郎吉と
以ふ者ふとかげらうりひうちへりがくらへもせくくあ
事へゆく後よハ股ハラからて刀をさすゆきとくをそ
ひきれはづるよば女ところくよ底あひぬ生てそ
つをあく義をあらへゆきとくよもあつゝさうと領
主もその自言と嘗へて未とあくふくりハ京保
十年丸車ふりくわ

孝行者治郎右衛門

治郎左衛門ハヤシ治郎右衛門村乃鷹山田中か乃百姓あり

高十石二斗ありやうやく八十石より下り格老の母を
やへりひめ格老もくまくへけきハ九歳よりお孫入
を立タマクふ仙ち郎支帰ハサギハ賃券ヒヨウに人の毛と小
はくさせそ北治金ハセキをうりて母とそよぎひむる迎記
あくうつまねきゆく事ありハ何うくとも殊味と
つらうくお拂ハシマ或ハ市にりはハ酒をもとあく
母よもくじ蔓ハスの蔓ハスハ松マツとよ故遣ハシマくまの御
毛ハサウエの毛ハサウエよひ火ヒとつこがせハシマくまもとく抱
くえ役ハシマくま生ハシマすも食ハシマくまめニ立タマクくゑに
帳カウとこひ帰ハシマてひ必安否ハシマとくふ食ハシマくじ事ハシマあ

里やふちいとあどまつてゐるそろ日丸車とともに
ノくやうりぬ又妹乃他村より嫁してありしり
主洋へやんとあまの仕事とうらむとてくもも
うら替わひめに帰るもあく志をすりとくもも
親族よ暗しく郷黨のもやうけとげゆ領主
小告け色ひ葉をうせく寝ぎりへぬ是豆保十二年
の車もそここえへ治療大薦時ふふたふとさん

奉行者八十郎

奉行者かや

會津郡小田村系小田町より豆保八千郎ハ妻のウ屋

さもおの父母につぶる事為左あらは八十郎いま
五十四歳の付まとつまく父奈八郎が弟にゆく市
町のうそにて他乃家を跡と紀もひてとくも
ことぶに父乃よりうるまひへき住居する中あま
ハ高ひ乃本多とまことねからぬせん車と叶
ツルとことづらうひててくる事あきがともかくも
せかとゆうりけよ其後小田町より豆保八千郎
の夫と高ひけるか十七歳の娘ひまか不祥も出来ぬ
進ひ今よと父母代身をそくあんとくゆる美内
物より飯茶味喫せ物やうのれ持まつて忘車ふ

うへりんとまよの父乃ちふあ
娘は娘といひゆく母も若き事か志る人へ食
無どくとも殊しに心あきに懷かしくて父
母なりふるやうめあつて父母のよ酒を
もねすと日二日金く必死く酒を調へる
うち勢へ来て愈めぬ中没すり妻はじくへ
きもあへゝ男始よつよろ車へつゝ無ふ入ても
初ふらはしまく安否をさひ仰ふくも重内
ものあらんとあらあらせんかじりのあくまで父母
奉老といつてかくへゝ緋あひやふやまく往

せんのふまくへがひふ年未よ父のまくへと友
とえひと向しよ父たもひよりゆきと賣
の車もあんと歩むとへハ泳がり起
して通じきりれ定地ともよ賣ものあられ
ハ價すもくらして東よととめ室をと修理して
父母と移してゐせ本裁の木もくわくとああ
つづくの者ともつきあひせんといふと酒店の
修理キムアキをあひくとあひもくにさ
先あきいとくとく八十郎がもとよつてつるや
人をつよやうあへてのきくを教へ

く車うひへへせきせうも日毎よ車り
と起居をとひえの涼みうらうりきのまをあせ
くあくくいへぬ車あくもく病乃車をあせ
ひ日めうちに家度めあり側うらとりくりが
つと父母使されいや障がえくらるて用車
とも調つて今日あんうる車もあくへかと
りじとねくへよさう又ゆくもくく交とふく
妻子と通つて奉称くじといは母の名ありく
よひせ日火食をうち取思ふれ涼害よきを
主請へ父母よとさる車ほどとも思ひて何と

あくまくうきうきへゆくゆゆりひあく病いえく後
そのれあつても安くして年ことれ象に燈籠を
さくら車も二部と所よ及へ酒味燐油やうの
ああきうきひととひとせうが今ハ金錢乃入
ああきととを分りうれ出入口及ハ必父よそひとそ
うひうひの父母のそあよ友をれ夜乃涼みをそ
ま首とうけ茶もうれうううとえうと魚魯茶
太根の野あくねうしきとひとをうめ新も塵
埃の理走ねれ本とそ父母の料とひうける是
つに潔を好む癖あきがあり金錢の事も

着ひきぬ用途もあとさうりとくと今ハシマる
主の用事へとくうけぬを高の車よりくふと
ぬ利潤をねし、つゝもあらかうりとくとくとく
らへねまきうわくい我故へ父母とじくもとよ
とよひ父のまくとくとくのをねまくと心をよ
くさすじま婦とく節も父母のよみよみこ
とくとく孝義せり享保十二年額主うり八千郎と
其妻に寝共うて余とあくふろ事もあらず

忠義者ニ矣

耶麻忍水窪村乃ニ差ハ九月よりよみ津社の役人

新妻常力がもとより中男となり仕へし。他よりくれ
て貿益あり。常力の家はのれんのあくありて更
くやうしとろを裸うて骨あう筋も食事と
そくあり。へうりとくとくとくとくとくとくとくと
筋あく背たひよくゆく來て九月のあくと
小うちと必細を作り茶と番薦をさんときどき
を豆のつむぎもある。よねづくらぬくのる葉せ
ひひくらぬ下男とくひいふとせよそくらぬんも
ちううけむ。筋のまも体めようとよをきふ
ま人の食をよじり。ハハキモつづくあつる。二年

おうとうとくやうに連と帯刀の母年老て田年少へ
うち中風とやくよきも叶ひぬよ幼みも二人やく
あり、帯刀のおまあらぬ財、妻れよも及ひうるを
とこ背よむとおひきくら畠乃事かとあつひて
もううとともふいとくと父のとま湯を浴やすくも
うちもゆうやうがりぬきにほへよ候乞くわ
ねとソヒをこせしととくへつひとよと妻じく
よどりともすりきと帯刀の衰くとよすすりあ
て活食とも人うとひらせ祿ハ賄出さんとひと
うくまづくまづくとくとくの畠乃事たらぬ

事多きことあるもあらばいよくとくやねといひとく
べし齡くとぬくとくとく母老とけきと西ふくらよう
つひてもしく公の勤をとそよあらせりひ
きく事うぬ事ありたく任せ並ちくとくほりあ
るきく年はばかりて妻じくとくらんハ父のふも
たうひぬべくとひくとくよいアケキハ家保十二
年れ秋よじくけりかねおとくの帯刀のもとくあ
里く恩義とつづけりけりけり主へうり能主へ
や出けりハそれ年寝若あうて莫とくせぬ

孝行者勘太郎

勘太郎ハ耶麻船下利根川村の百姓あり父を勘太郎と云ふ郎となり十六歳の時に奉仕のたゞさるを補ひんつたるが若松乃城下七日町に貨客奉行を出させり、父も才色痛烈よりして遠方より往へとてはそのとくもあつてくらむ同船のうち下川木材よりおこしと五年代写こよんおうちつゝ体日すゝは主人の用事と云ひとのきつ木業ともて年くよかへつれどくへどく年貢の朱を今年やうくにとくに償ひぬ二親とおとおさふへとくともうきの持ものうらへ候六畝

余のところと云ふよつてひあくにまことう耕しうちの穀をひそへをまづひそく料ひく年くの貢ねハ承乃本業をひくおこめうと下川木材の年季もとくかくまことに仕へてうきの家回船大陸村といふ所の年貢せしの親里やうく二里あり隔てると夜てとよ薪と運ひ船の中小田舎をとめくらう父母もつまれば舟あきぬうれよまくうつまく内写とつ車か或は親のよくとにいりそこをのへうつて歸つて船まで度んでしけきの載文もあくと親をぬくものと

一のゆうしにほりと車へてまわる事なくやうふ
をぬく景乃よりの掃除あるとまづうう
せうじそ勘定の先祖のもの追福の石碑が送
き出んがまことに家業として力及びうるゝと魯
角へて送り立親のふと安らかじ父もまた
八年ほどようむく毎の二つといやあ
小暮まうとからと年々食料薦やすし脚
も木をせし車旅して三年ほどうり去く年
すくは年めぐらし因羽大田村より一が二町
ありて隔てて川をめぐれの往來もひきうぬ

を乗じてよ川を渡りかひひとのくろい原へてほ
一日の移るゆく殺生、多く殺すがよ人の方にえりしか
まく車うり因羽中野自村乃所を役まことのうか
賃券をつづへて、村の長めまうきひねまくあとも
出でてこの日隔てて轡中引て母にあひその轡中にか
へりぬ親族のまつもひとて村乃まのよも睦つ
く田畠よりの道かへておひこづら絆ひあくと
をとて村遠き里よりおもく人よへ宿あらそひ
事おもむつきつて實義する者おもむきにまほ
十三年廢帝とて領主おうり景そこそくをと

らせんぐ

奉行者 植左衛門

奉行者せん

植左衛門の會は必ず村内百姓をまとめて奉りて
うなづき世渡りうなづきと申すとまへうら睡へくと申す
よつてくと申すとまへくとまんじ控をもつかけくも
公車 諸公の車をとつひかへきものあらと見え
二十七年とまづかへり毎年六十八よふまうこう
ナ一車このへと腰へてよしもがまうと食車もと
つまづか車をまづ申ひ傳うり音ひうとうと植左衛門

主とハ六石八斗あまりの主と都へいやまくせ賣
さうねば九年うねよ年貢のたらうると浦川んと
田宅を領へよさけん事とこひへうべ村内車を
く役へよう年貢のむへたらうるハ月を賣く年
させハそ乃月のへろとびく皆海もやどりへと
さぬくよすくめへがよき年若されいゝのも
てえりとのとくられ田とも持百姓の數よいうん
もあらんあきと毎年とともちうね老の身内病
にそと妻も腰姓のことよきひ若主と賣あはれ
うハ母とやへよへと其と田畠の勤よつとてもの

つら母のまゝいとうそすむるん事のあきや
さくつあよ田宅をたゞまづり佐吉といふ者内
衆は経ちうのぬをめりて母とまゐせ日とてまえ
ぬしてまゐづりを髪結かこまくわづらぬやう
すもてう一三度の食をきめふ後の不ふ抱きり
すくいぬらぬ事うづかとまづて時くよ湯を
もひきくに事するも母のふすうよやうにそま
まづける燈をまへんよやとつきぶくの市場よ
出く房あと背あい賃をどうりある時ハ給うと
まみくまハせきりやまのうけ雪浦内ほひよ

「され往來娘ハしけ色ハ母と抱きしむと慰なぐ
東もゆう起外うら称いま帰らもの抱きられ
その称ゆるとすく外へぬ行ふとあると人
のねさせへねはま川母にすすめ孫子つもこまづ
ちあくするとなはうあひいすくものあやまち
ありても何あらくゆうかとせハ母乃ふよさむ
たゞくこぬふくそ教へ誠をうらあくつり縫そ
うの畠田をねうるか其地のうへあーとある事も
あご母の挂よぬせ田植とりきハ母と背あひく田圃
をこめくわ邊は出るよも酒あとおりてそのん

と頼め農具家財の類すゝもかゝ事あきハ無
さひて永めぬ妻のせんハ活死北田村新左衛門
の者の娘となり新左衛門も世と云うつゆまへ
二十三年生れすり松左衛門とよむて生れた十年後
よ高てうせつせすのありしはこまでも授け
まひそめんよそしく事あるつこと莫保ナと年領
五十五度免へて支婦代きのよ達とあくへぬ

孝行者 僕助

若松内城牛甲賀町より僕助にてする若玄清僕助
といふる先年の者ありてよ櫻のことをとしめ

車と業とくして世をヨリテるよ若と付すり和
らうふるふ性よく親子のひい先年のうつひよ
もこのあらきよ若業つひきとせし車とく日表
よ暗し、うき父ハ二年生業よ病くうせし
せようり一時ハ母も才よあひうる勤をうせしに
父すくあうて後ハ母も老衰へく起外へよ自室
うちと見えよとすよ家業とつらぐく母とまひ
し、おまくからふよあらぬとの二人の話と
ハリキの母年老されハ先年の者よ妻を近づ
世の嘗内助をともありよんなどいにゆきひが

つてひびきのうらむるをへに中におの内へもくみ
りゆうとおまめと遊そらすもふらんとくつるよの要
らうのうこ毎の年既たのとわくろ會ははこすと
の朝もよ頗れせん事とてほのこりてあがくぬ
根かどもうだを名儀もとて七年のうちのを安
まく宿させ或はよのつきのまにまうり或は出湯をと
に浴せてもる母のふなそやうせける見の昔ま湯
もは五年よりこのこと眼とやうよつゆの目あ
けきくもくへて世代とあると歴々の極も通
くさうの浦を隣のわれまよゑひとよしのく每のく

も見るのも人をひかようたり姉妹のうこおま
まはせてもあまきくふとひよおひよお方をやうせ
つけのうふらまくにんをまよへてもあまきく
まよへうく者もふとく車やあらんまよ飛やゑる
身ともあり飢きよ過る事あらんよハカとく
て先とせる事あるに方よまくばりうるよ骨とく
らむともご人の老ひふやよくらん方にとくめせんよ
そぞ意うきとくき暑とひとよ豆の茶とふく
とお葉とひとよおまきくかまく年七十九年まよ
て毎ひうせぬ高中のまひ醫藥の事あくある

とくとく見よつてく道をつゝと目あらひまづく
家の内あらあらうよふくと日暮の抜け若す
酒を好へ毎日とふつてうきをとその徒を
を慰めにけ車頭主のことをよく家保十一年見
まふ年とあくべと寝させり

孝行者小池小伯

若松の城下馬場町よりきらく醫と業とする小池友徳
とりふ老あり甚るハ小伯とて自志るより妻ハナミ
年三十の小伯、ニ弟のとて承うり并嫁して來

れたり歳種うへて友徳あへて病をゆくか乃
内もありとひど二使の用ひよゆくともその妻
あまとゆくは妻ハ弟もとくも称と初とふと
るが如く起跡するもとつを愈て妻ひへりと友徳
病の後ハ人の前より出でて藥ある者もうけきる
せりといたつてもゆきくまく妻の夜服様筋半
て臺もろくやうくにござりけびに船の櫓も
詰るんとむると妻ハ船くいとも夫と繼ふ小伯よ
のとくせんぐり船へて夜の裁縫ひ又ハ船泊ふ
事あらへて飢きとも夫のきりつある財友徳妻

ふむうひてヨリよ小伯よりのうそつよとのふの
とうへまひ我も十年あまりゆくうちを爲と
うけ世のひとうみの若しと中にとく先年じく
生とくまかさんも使うけきハ年若をうらにほ
方へあうともやまとさのうるへどもせうへとつよ
み妻れりよハ時の宣ととむはつまちの今さら離
きよのせんやうきやなる走と目見るのみと
さとく坐くいよい誰ありとまひようほくらう
飢きにせぬうともくうへゆうくまくうけひう
生を安堵へとくも優あへとく縁すうじ生よ

とりよに草すもひきだいよく眞伝乃道とそほ
ける志うるに小伯ひとけくして琴と味縁を引
あらひ十景乃はうりゆうここの席につくあ
世成りうるううとくともううへううよ去年う
腰満乃痛とうけくおうくよとおううねと來
きる方よハ痛とまのひて行こうじてうひ走ぬと
飢渴に及ぶともせんとくあく病ひうらにきて
出立へまくまくあくめんへとひとあけるに仰せ
ハする事あくまう強くねすも出ぬきかへいも
もう事あとひて二親のふとやまくらしあとのれり

業とつゝ父母とやゝうひ業みやうのお育かど
ぬきハとのをひくともくおぬり父の酒を好むを志
すく業みやうよひる本の薬一疊も色の用とすと
主と目ことよ酒の價よりかよくめぐらへてお經
をとこまへ親に不すしてんを慰め友説うあゆ
うきて二役の附ははよのと枝えうると目あむ乃
うりのくそのよすとくの車をきらうるとのそら
うりしけるとくん東保十ふ年頃主より 譲
て母と子に業そらくとあつて時よ小伯十に業
そらうとそ

孝行者業み湯

差業湯の山江野中日村の百姓あり業み人ありく
植右衛門侍郎とそりひきる兄弟とも小よもやう
ちう生れつゝよしてくにせよたのむきる事には
あへく業おありてふ年うれ柳津の虚室叢書庵の
帳と因ざくあくの人に業み人車がありし時老
馬の抱とせ孫かとあすとあきとも業み湯うづ
ら馬のじとくらぬとくらむとくのねぎして歎
あきと津福理うづり或のあまの仙かとくらむ村の内よ

某ちと二けの母と背むひりとそれ年と経て
じ度も當の妹のふよ嫁入るあらがましく母の
弱ゆことよ兄ありんく背むひて送りと迎へ
ぬある時度も湯じつひよお背すあひへりにわ
しも箱の畠内縄あらじう田舎とさせよのうの
子の宿は郎の田もやくやとりひつゝ其の下もあひ
やかくせづくを慰めきりとせ度も湯湯殿山
小猪のふともほどり事ありてほひつもの
ゆづく日に一日とくと程ありされかも一回し
えらばれゆく母のふよおれ事もあるま

どういおうと東洋赤湯うつび二十里あまりの道
を歩きととてそゆうじぬ是の者いつくの見
てもへる時の薫子又ハ音もとめ初き豫のあくに
母のとくとを母の外と之をあくがゆうう
あるおをととの外拭く母とい称うを甚の涼
くさんやうよどふととくぬちよ度も湯と極
右筆の別見にほくまの宿は象のと母とおふね
と度も湯社をもとむとおれことよ母とがくと
る軍さくとてよはめく國よへく世の中の軍
行ふととね徑しその眠きとよめくゆうと

と先身睦しく親族の親しく村の中の者より多く
公納をまんく課役をうどとあるとくある
ぬ者もまことに見えますと人の頬をうり茶とどら
せりうるを差去清財の年七八とぞことえり是
享保廿五年の事とす

農業生贍与施

ふるの歌麻引宮自村の端はよくお義新田といへ
るの百姓ありその祖父もよくお義とひつてか
新田開き役せし家とお義新田と唱へてもも實に
ありますれど百姓十六人よ多く耕して水く困る

お養ある者ありこそ今のお義も人よ多く実生たる
ものよ多く公法をまんく農事と勤しかばあ
うへ田のこあるが水のうちあく年々くに不作
にて下免の田の定りあるく領主の主當とも清
いとば年は旱の損つて十六人の者をひくに賣
つね毛口うふ強まるものと人づくま余の地あひ
あけ毛口うふ毛口うふ百姓のもととくにうくへと
ううて敷田とつふもれようせし地中よもありてあ
しこれはお義の方よて貢税の不足と補ひて敷
田のうち熟田の所持と人よきうつ作らせあり

田の主耕しく強制ると自ら耕し解もる余る
くと村の百姓の中より考くる者初ども又ハ女
もより多くもいひてかよのとも田と作ら称ハ就よ及
ん事一とるももして田と云け使はせよが
アヒて後りこそよりれよよりて年の貢も宣
せり、また年余十俵を出して納免させを乃
僕もすくへらぬよ去年も又不見してこれともや
多く補ひくとそ甚かすも年貢すくハ被錢かこ
出へよきてみやうる者あるとされば已に儲うる時
もとくもあはひて公銷をくじむる事

かうりと享保十五年領主より米をあへてその
力田と當と

奉行者かん

河沿郡奥川村の百姓又云湯といへる者は十一石余内
すとねに二十年ほどまつて錫の又七席とりふもの
は十石余あつたまづ別處の主ぬせ又云湯主ぬ
子勘定主婦女孫二人あり年々二千石二十五石
余の田と耕せりかやうく云ふくあり行女孫
一人ハ貨券をくまふせさせ又云湯主婦も考へ
ら上宿のこへ祀ふれて農事もんのすあらと

まつゝの勘定帳の支拂の多業よりおるのうち畠
田のたゞく強力田を耕せし小勘定帳も去年の
四月うち病あつて五月よりうとうせずのうち
その後ハ田畠の事あつておこえうり畠始内
ふ抱ひゆくがんへ人の力すくまひしの老きそ
ありてへ親とよし初きかふのくよく日々の
費用もまことに年貢れ事のと大切なるひと
初秋の中うち割符茶といふものとくふく
もうひと納へか女の力なきハ老内あくすよ
運ひとくおこむなつてうへ迎えことと爲乃

者とのとせられ年忘れ代見をさへて脚も杖の
うちのひもを頬にとて親乃ふともいはずめ
さうもとひとりや色あらがゆあきへ持ての田と耕
さん事から耕田すもへらんと云ふことへふ
べき人もおきどもへまおまうりの田ともあらず
領主のあはれ不盡ともなうらんとくまめ代うり
を教田をしのこまつてとあるを多く一町の段餘の
地とまづつら作りおれまよ耕してまたうりある
よ人をも備へと勘定帳のう病あつておこむ甚の初
うち秋のまづく六月乃ち金利もまきのう親

の側もありて無もの様と並ば田畠乃事とあへ
うえうせの後に二親の業どもいはくとふをう
け孝養とさせりか領はりまじめにうせり
嘗せりと乞業保十六年の事より「
家内睦者市之盈

家内睦者流田郎

大治元下中川村の百姓市衆吉清とふきみ子二人
ありと兄を市之盈弟と流田郎となりふるやくよ
り農事によつて公納とてうりきり足らずとも
よ人のよあすり北田ゆゑ引うげて耕し領主

の頃あらんやうにふとつゝへ公事とまんへ接
をちりづぬく人達ふらふ出てもすらやうするこ
となくよどくれ公用の事とて不役の事く
も元よりの傷あつての寝兼とうげても
たひくうりことの事よりも父母のじめく
くうの親族をうちちふるの者のも睦く
おにも争論うゆまに事かうむほそく孫も
おと祖父母を敬ひお嬢の中じまくとふを養
ふすも乞業北隅あくふも又いのと親ともうぐ
うつと互うに乞業乃被をさせりとを市衆吉清

つ称す。我せよあるうち見えともなり。或は
うりへきなどひされども未だともあましむ
ひとの名の名を名タとす。後つてこそよ
くらましく事務もなきよう。享保十七年
廢業して布施主清と號す。ふくの領主
あり。某あべへとさん。

貞直者はか

はみ大治郡西麻生村の百姓安左衛門。子平助。妻
あり安左衛門もとい。肝煎役とも勤め。不幸のゆ
きつこと家業へりあり。九年。元禄四年役年も

辞せし。是婦とす。病の男とす。平助も十
二年。狂人とす。うの病といふ。あく細病
とす。平助もい。初にて船の用す。も
ちうへ。耕作の事す。もれハ婉うつみ。人づく
カとづく。しけがあましの人に。をまふよつてひと
田畠。乃寧も。やまく。あく。す。やまく。に。田畠。
乞持の田も。まほ。と。貨。地。よ。じ。き。せ。の。ひと
も。あく。あく。よ。あく。よ。あく。よ。あく。よ。あく。老。若。の。若
と。と。と。飢渴よ。あく。あく。と。安左衛門走ぬ。も
病の化。あく。あく。せ。あく。あく。と。負。く。と。責

ここへ坐とてまつもさうふまくつて居よ
とお夕の膳をさうめ松のものさきひ萬葉と格
ひて茶道の料りあすく酒をともどもく
男婦にあこへるものとうそうすらむく實家
父母のつづふるよ黒々と半助のねくろう
くじつとまくのほの肌被毛膚血など湯を身を
もひととよも足らずと冷ろとしけり自ら寝め
りりりけり留れ来た事のもううみのひと
まう年助はとうもくもくろ悪疾にて醫薦せぬよ

ふよあらば姉の奉若くしてどうのむかくすむ
かうかんをいつ方すもあき半嫁して身を
くまくはとけうるゝものへゑのものくらんなど
りよにひひき姉のくまひとすきく身をま
の痛まきをくまく出でくまうひもくらむとそろ
よ二親をそくめ病の姉せう支ゆく飢はを
よひもへん事のあこよへくふ人の初き老妻
ゆくくへとありたまくまくやう若ひあ
るゆくけきいふつよひひきくふと慰えくら
小蟲を難うするあつてかの留姑もよまうひ

てあらまことかひよこてのふうりも觀へ
三領主も出来どもして享保十九年と云
に安左衛門と姫つみと廢美とて茶をあふる
る事あるわ

孝義錄卷之十九

